

## 論文要旨

氏名 彭腊梅

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

# 中国中世の妓女と文学

—蘇小々に関連する詩歌を中心に

論文要旨 (別様に記載すること。)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。  
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。  
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体(1枚)を併せて提出すること。  
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

本研究は、中国中世文学史における蘇小小に関連する詩歌を主な研究対象とする。蘇小小は中国南齊時代（五世紀後半ごろ）の錢塘の名妓と言われる。彼女本人について当時の歴史資料は何も残っていない。彼女の名前は当時の艶歌集『玉台新詠』の中に載っている短い詩一首「錢塘蘇小歌」によって知られているだけである。以後二百年近く彼女の名前に言及するものは誰もいなかった。ところが唐代中期になって、俄かに多くの詩人が詩の中で彼女を取り上げるようになった。続く宋、元、明、清と彼女の名前は文人の詩文の中にしばしば出現し、戯曲や伝奇小説の主人公としても取り上げられた。民間においても、蘇小小をめぐる逸話や物語は、今日に至るまで絶えず語り伝えられてきた。しかし、実際は歴史上の実在としての蘇小小とはほとんど無関係だといってよい。前述したように、彼女本人に関する文献資料がほぼ皆無であるために、後代の人々は想像や創作の中で彼女のイメージを作り上げてきたのである。従って、本研究の対象も蘇小小本人ではなく、あくまで文学作品上の「蘇小小」であり、彼女が文学作品においていかに取り上げられてきたかということである。言いかえれば、「蘇小小」という記号が六朝・唐宋の各時代の文学においていかなる意味とイメージをもってきたのか、その伝播の過程と背景を考察する。そこでは当然、文人と妓女の社会的文化的関わり、妓女文学も含んだ広い意味での妓女文化も問題になってくるだろう。

#### 先行研究について

近年、中国妓女文学に関する文化的側面からの研究が注目されている。齋藤茂氏は『妓女と中国文人』（東方書店 2000年）で、詩歌や小説・戯曲、そして新しい文化について、それぞれ妓女が大きな役割を果たしていることを明らかにした。また、陶慕寧氏は『青楼文学与中国文化』（東方出版社 1993年）で、唐代から宋、元、明、清時代まで各時代の社会的文化的特色と文学に表現された妓女の間を考察している。しかし以上の両氏の論はいずれも総合的なものであり、蘇小小を中国妓女文学の代表例として特にクローズアップして研究するのは筆者が初めてである。本研究では文学作品における蘇小小のイメージを、各時代の妓女の実態及び妓女と文人との関係、文人たちの創作意識の変化などに着目して考察する。

## 妓女の歴史について

中国妓女の歴史は夏と殷の時代に始まった。歴代の君主の宮廷には大勢の美人や女楽、倡優などがおり、これが後に言う宮妓である。一方で朝廷の高官や貴族などは君主に倣って家に美人や歌舞をする女芸者を養った。これは「家妓」と呼ばれる。また王書奴氏によれば、家妓は召使と妾との中間的存在であった。家妓を蓄える風習は漢代から始まり、南北朝に盛んになったという。しかし中国の儒教倫理社会では、妓女は皇帝・貴族・高官の豪奢な生活を示すもので、好ましいものではないとされた。さらに女色それ自体も人間の墮落や政治腐敗の大きな原因の一つとされ、「徳」の対立概念として否定された。そのためか漢・魏・晋の貴族社会では、妓女と遊んで楽しむことはあっても、詩の中で妓女的美を讃えたり、愛情を表現したりすることはあまりなかった。当然ながら妓女をテーマにして詠まれた詩はほとんどない。

このように本来は詩題にならなかったはずの妓女だが、六朝期には詩題となって詠まれるようになった。また唐宋時代に至っては、妓女が詩歌や詞や小説などさまざまジャンルに描かれ、中国文学上に大きな影響を与えるようになった。

## 蘇小小の再発見

筆者はなぜ蘇小小が中晩唐期の文人に注目されたのかという問題を探るためには、まず、蘇小小が生きた六朝時代の妓女文化を考察する必要があると考える。この時代、長きにわたって社会における負の存在、社会道徳上否定されるべき存在として扱われてきた妓女が、詩題になってたくさん詠まれるようになった。このような変化の背景には、六朝期において文人の妓女に対する態度や観念に何らかの変化があったのではないかと考えられる。今まで多くの研究者、例えば齋藤茂氏は、唐代の文人は特定の妓女に親しみ、彼女を一個の人間として捉えているが、六朝期の文人の妓女に対する認識は従来の没個性、没人間性のみであると指摘している。確かに六朝期と唐代の詠妓詩には、対象を捉える表現の具体性と多様性において違いがみられる。しかしそれは唐代の文学全般に見られる傾向であって、その原因を文人の妓女に対する認識の違いだけに還元する必要はないだろう。ましてや個性と没個性、人間性と没人間性という

形で対立させるのはいささか無理があるように思われる。そもそも社会的に底辺にあった妓女を文学表現の対象として作品の中に取りあげ、その容姿や技芸を讃え、その歌を聴き踊りを看ることの愉悦を表現していることから、「作者は妓女を物として視ている」と結論づけるのは難しい。むしろ従来は物であり風景の一部であった妓女を、文人が女性として人間として遇し始めた兆しと見るべきではないだろうか。

そして中晩唐期になると、二百年近く誰も言及しなかった蘇小小が、俄かに多くの文人の作品に取り上げられ、人口に膾炙するようになる。唐代の文人はいったいなぜ彼女に注目したのか、彼らはどのように蘇小小を詠み、それはどのような意味を持ったのか。それは宋代においてどのように受け継がれたのか。このような問題を解明するために、本稿では四段階に分けて中世文学における蘇小小に関連する作品を考察した。

## 各章の構成

まず第一章では、六朝文人の妓女全般に対する態度の変遷について論じた。具体的には、六朝期の詠妓詩を中心にして、その詩題の選択や文学的表現に着目し、文人の妓女に対する態度や観念がどのように変化したのか、またそれが詩文に対していかなる影響を及ぼしたのかという問題について考察した。中国古代の詩歌が妓女を描写の対象とするのは、六朝期に始まったことではない。しかし劉宋以降の妓女をテーマにした詠妓詩は、その表現と内容において明らかに以前の詩とは異なっている。そこでは歌舞の美しさだけでなく、妓女自身の表情や身振りに現れる心情が描かれている。時には妓女の不幸な境遇に同情したり（代妓詩）、時には特定の妓女に対する愛情を表現したり（贈妓詩）、時には亡くなった妓女を哀悼したり（悼妓詩）するなど、ひとりの感情を持った人間として妓女が描かれている。そのような変化が生じた原因は様々考えられるが、本章ではその根幹をなすものとして、次の二点を取り上げて論じている。

一つは文学創作の集団化・遊戯化、また宴会の世俗化・享樂化により、詩作が個人の私的な営為から仲間同士で応酬し合う社交的な活動となったことである。それによって様々な詩題が気軽に取り上げられるようになり、「妓女」もそ

の一つとなった。もう一つは劉宋以降、南朝樂府民歌（吳歌西曲）が宮廷や貴族階級に浸透し、宴席で妓女に歌わせたり、模倣して詩を作ったりすることが流行したことである。その内容は妓女の愛情生活をテーマにするものが多かったため、文人の妓女観に影響を与え、彼らが詠妓詩を作るにあたって雛型を提供することになったと考えた。

続く第二章では、蘇小小に焦点を絞り、彼女の名前が初めて登場した『玉台新詠』の「錢塘蘇小歌」から唐詩に至る蘇小小の変遷を辿った。「錢塘蘇小歌」は、一般の南朝樂府詩における女性のイメージとは異なり、自ら積極的に永遠の愛を追い求める独立した女性という、当時としては斬新な女性像が打ち出されているといえる。中唐以降、多くの文人が蘇小小を取り上げて歌った。その詩文における蘇小小のイメージがおおよそ二つのタイプに分かれることを見てきた。ひとつは杭州西湖を彩る名所や特産品と並ぶ有名人、錢塘妓女の代表としてのイメージであり、もうひとつは「錢塘蘇小歌」から出発して、文学的に想像、創作された、恋する女のイメージである。そこには唐代における文人と妓女の関係の変化が反映されていると考えた。

次に第三章では、蘇小小イメージの変遷の背景として彼女と江南文化を巡る唐代社会文化を明らかにした。もともとは江南地方の民間に伝わる六朝歌妓のひとりに過ぎなかった蘇小小の名がこれほどまで有名になったことについて、従来の見解では、中唐以降文人たちの江南民歌や六朝詩への関心が急激に高まり、それらを学び模倣する中で、そうした流行のひとつとして蘇小小への関心も生まれたと指摘されている。しかし忘れてはならないのは、そうした現象の背後に安史の乱以降の政治社会状況の劇的変化があるということである。文人の中央政治への幻滅、六朝風流文化に対する再認識、江南文化の発展と地位の上昇、民歌への関心など、みなそこに端を発するといつてよい。安史の乱以前の初盛唐において蘇小小への言及が全く見られないのも、そのことによって説明できるだろう。蘇小小への関心を促した要因背景はもちろんそればかりではない。宮廷の教坊を中心とする唐代の詩歌と音楽との関連は詩（詞）と曲の一体化を推し進め、文人の間に歌詞創作の流行をもたらした。そこに欠かせない

社会的背景として酒宴があり、その規範化と日常化、酒宴における妓女の役割の増大は、文人の妓女に対する認識を改めさせた。そして中晩唐期には、詩作を行うなど文化的教養を備えた妓女が続々と出現し、作品の中でもその名が言及されるようになる。このような重層的な時代背景の下、蘇小小の名は江南の文化妓女の代名詞として、白居易をはじめとする様々な文人の詩文に使用され、また使用されることによって逆にその名を高めていったと考えた。

最後に第四章では、宋代文学における唐代の詩歌に歌われた蘇小小の受容と継承を考察し、蘇小小が後世に与えた影響を探った。唐代の作品を通じて蘇小小を知った宋代文人は、蘇小小とは何よりもまず名妓の代表であり、個々の妓女を総体的に表す記号、代名詞として受け取った。しかし彼らが作品の中で蘇小小の名を用いる場合、それだけではなく唐代とは違った宋代の特色が付け加えられた。例えば唐代では、自分の思いが叶えられない悲恋の妓女であったものが、宋代では文人自身が思いを寄せる相手、恋情の対象となった。その背景には宋代の文人が内心の私的感情を表現するのに詩文ではなく詞を用いるという慣習があった。また宋代に於ける商業経済の発展と都市文化の繁栄は、妓女の社会的役割を高級な官僚のみを相手にする地位から庶民まで相手にするように引き下ろし、それと共に「一般の酒樓で客の相手をする妓女」のイメージが一般化して、蘇小小の名がそのような庶民対象の妓女としても現れるようになった。その意味で妓女は都市の享楽と栄華の象徴であったが、それ故に国が亡び都市の繁栄が失われたことを詠った作品においては、追憶と感懐の対象となった。

宋代の文人は、天下国家に関わる公的領域と自由な個性に関わる私的領域の統合を実現していたと言われる。私的領域において彼らが憧れていたのは、妓女を伴い酒宴を催し山水を遊興するといった、いわゆる白居易の「中隱」という生活方式であった。妓女はそれに欠かせないパートナーであり、そこから隠遁の伴侶というイメージも出てきた。更に遊興の最適の場所、隠遁の理想の地として西湖が注目され、多くの西湖遊覧詞が書かれたが、そこには当然のごとく蘇小小の名が使われている。それにはこれより先に司馬標の物語が流行し、その中で隠遁を勧める蘇小小が出てくることが少なからぬ影響を与えたのは間

違いないだろう。

蘇小小は今でこそ西湖の風景の一部と化しているが、彼女が西湖を巡る詩的世界の登場人物として定着したのは宋代からである。前述したように彼女の墓もこの時代に西湖の畔に建てられた。これ以降蘇小小の物語は西湖と切り離せないものとなっていると考えた。

終章では、ここまでの考察を踏まえて、蘇小小という記号が六朝・唐宋文学において持つ意味とイメージ、及びその社会的文化背景についてまとめた。また今後の課題として、明清の小説に現れた蘇小小のイメージの考察の必要性についても言及した。